

# 無差別殺人をめぐる社会学的言説と当事者の言説<sup>1</sup>

——社会的非条理を「理解」しようとする言葉たち——

片上平二郎 KATAKAMI Heijiro

## 1. 非条理の理解を志向する言葉たち——四つの言説

社会空間には不可避に非条理が存在する。条理に覆われたものとしての社会に唐突に非条理は現出する。その社会的非条理の一つに殺人というものがある。だがエミール・デュルケムが語るように、犯罪は個々の日常にとっては異常な出来事であったとしても、一定数の犯罪の発生は社会においては正常な出来事である (Durkheim 1956=1978: 160-1)。例えば、犯罪の増大は社会にとっての異常事態であるが、同様に、極端な犯罪の減少もまた社会にとっての異常事態である。条理空間としての社会は、一定数の非条理をも条理としておのれの中に組み込みながら、自らの秩序を維持していくものとしてある。その意味で社会空間とは表層的には条理的なものに見えながらも、同時に徹底して非条理的な空間としても存在する。

しかし個々の人間が犯罪という社会的非条理の発生に適応することは相当に困難なこととしてある。だから、ひとは言葉や論理、物語というものをを用いて、その非条理を解釈し、理解し、それを再度、条理の中に回収しようとしていく。

このような回路を社会もまた必要としている。条理と非条理の関係づけを適切に行うことによって条理空間としての社会の秩序もまた安定したものとして存在することができる。理解というものによって、非条理は条理空間の中での位置付けが確定される。これに失敗すれば、社会はおのれの根源的な非条理性を露呈させることになってしまう。

本論文では、無差別殺人者に関するいくつかの言説、およびその言説同士の関係を分析することによって、このような条理と非条理の間の社会空間内での編成の運動を見ていきたい。言葉や論理、物

語がある出来事を「理解」しようとするということにおいて、その「理解」がいかなる社会的過程の中に置かれたものであり、また、それがいかなるかたちで社会を再編成していくものであるのかということを考察していく。

無差別殺人者の理解の在り方の一つとして、それを理解不可能なものとして理解するという仕方がある。非条理を非条理として把握し、そのようなものとして条理の中に位置付けるという仕方である。例えば、鈴木智之は心の闇という言説が近年、持ちはじめている社会的効果について論じている(鈴木2013)<sup>2</sup>。この語りモードの中では、犯罪者は異常者や逸脱者というカテゴリーの下で把握され、社会との連関を切断されたようなかたちで理解される。無差別殺人に関する主流な社会的理解のモードとはこのようなものであるだろう。ここでは、非条理は一つの処理されるべき出来事としてだけ存在し、社会はそれになんら影響を受けることなく、今在るまま、今在るようなものとして存続し続ける。メディアの中にはこのような種類の言葉が溢れかえっている。

だが本論文で扱うのはこのような言説とは異なった働きを目指す言葉たちである。社会とは無関連である、という社会的位置付けによって非条理を把握しようとするのではなく、社会との関連を見出し、非条理と社会の新たな回路を探ろうとする言説について考えていきたい。ある非条理な出来事をあくまでも社会的なものとして捉え、社会との連関を探查することによって、個別の出来事を越えたかたちで社会自体に内属するいまだ見えぬ非条理を新たに見出そうとする種類の言説である。そのような試みによって、社会は今在るままのものとしてではなく、起きてしまった非条理との関係の中で、新たなものへと組み替えられる可能性を持つに至る。起きてしまった出来事を単なる異常なる事として処理し、忘却し、日常へと回帰させるのではなく、出来事を出来事として「理解」しようとする試みがどのようなものであるのかを考えていく。

本論文で考察の対象とするのは主に二つの種類の無差別殺人理解についての言説である。一つ目の種類の言説は社会学的言説、すなわち社会学的な思考法によって殺人を理解しようとする言葉たちである。社会学とは、事象を徹底して社会的なものとして捉え、他の社会的なものとの連関の中で理解しようとする学としてある。よっ

て、そこで行われる理解は必然的に非条理と社会の回路を生み出すものとしてしかあり得ない。

もう一つの対象とする種類の言説は、犯罪当事者によって生み出される言説である。彼自身においても自らの行動の意味を完全に理解することはできない。犯罪当事者は、孤独な反省の空間の中に拘置されながら、自身の引き起こした出来事についての理解を堆積させていく。それが外部たる社会に差し出された時、その言説は自身と社会との新たな連関を生み出そうとする言葉となる。

この二種類の言葉たちは、通常メディア的言説<sup>3</sup>が切断しようとする非条理と社会の関係を問い直し、それらを再縫合する回路を生み出すものとして存在しうるものである。この論文では、このような言葉たちの運動を捕捉していきたいと考える。その際に、学問が生み出す言葉も、そして、当事者が語る言葉もまた、事実を正しく摘出した言葉としてではなく、事象の「理解」を目指して展開される種類の言葉として捉えていく。それが言説という言葉を選択した所以としてある。

本論文では1968年の永山則夫による連続射殺事件と2008年に加藤智大によって引き起こされた秋葉原通り魔事件との二つの事件に関する言説を分析の対象として設定する。その理由は主に以下の二つによる。一つ目の理由はこの二つの事件が、二つの種類の言説の運動を強く駆動したことにある。この二つの事件は、社会学的な分析を非常に多く呼び起こしたし、また、犯罪当事者自身が書物というかたちで自身や自身の事件について語っているという点でも共通点を持っている。二つ目の理由はこの二つの事件が時に強く重ね合わされて論じられてきたことにある。後者の事件を論じるにあたり、貧困という問題関心を通じて、前者の事件が参照例として多く使用されている。重ね合わされた二つの事件に関する言説は、共通点と同時に差違をも見出しやすいものとして存在している。これらの特徴は言説の比較ということを行うために利点となりうるものだ。

このように、本論文は、非条理と社会を再縫合しようとする言説の運動を確認するために、1968年の事件と2008年の事件について、それぞれの社会学的言説と犯罪当事者による言説を分析し、その後、これら四つの言説の関係性を考察していくものである。対象となる事件も、またそれを語る言説の種類も無数に存在するが、まずはこ

の四種の言説の運動を確認することで、より多くの言説を捉えるための基盤をつくっておきたい。

非条理的な出来事を社会との関係の中で「理解」し、その関係を再構築していこうとする試みがどのようなものとしてあったのかを考えていくことが目的としてある。社会的出来事に対して、言葉はどのような働きを示しうるのか、そのようなことを考えていきたい。

---

## 2. 「まなざしの地獄」と「無知の涙」

高度成長期の日本では金の卵と呼ばれた地方出身の若者たちが都市部の労働力予備軍として歓迎されていたが、その中には不安定な労働環境の下に叩き込まれる者たちもいた。1968年、このような金の卵の一人である19歳の少年永山則夫が米軍基地より拳銃を盗み、日本各地で四人を射殺した。永山は最初に東京プリンスホテルで警備員を偶発的に殺害し、その後、逃亡の過程でさらに三つの殺人事件を引き起こす。彼は連続射殺魔と呼ばれたが、彼が幼少期に経験した貧困に対して同情的な世論も多く存在した。永山は1997年に処刑されている。

本章ではこの事件に関する社会学的言説と犯罪当事者による言説の二つを見てみたい。

---

### 2-a. 非条理を社会学的に語ること

1973年に見田宗介は「まなざしの地獄」と題された永山事件に関する社会学的分析の論文を執筆している。この論文は、質的なライフヒストリー・データと量的な統計データを組合せながら、永山則夫という個人の背景となる社会的世界を描き出したものとして日本の社会学のマスター・ピースの一つとして語られるものでもある。

見田はこの論文の中で永山則夫を語るに際しN・Nというイニシャル表記を採用している。見田は永山の生活史記録を利用しながらも、それを単なる永山個人に対する論考とするのではなく、そこから「現代日本の都市というもの、その人間にとっての意味の一つの断片を」考察しようとしている（見田2008: 7）。永山は自らが閉じ込

められた社会状況の中で『『尽きなく存在し』ようとした故に、その生の投企において必然に』状況を「照らし出してしまった」（見田 2008: 7）。見田は永山の生の姿をある社会における必然的な反映として捉え、その社会との関係を分析によって捉えようとする。彼は自身が生きた「社会構造の実存的な意味を……その平均値においてではなく、一つの極限值において代表して体現している」（見田 2008: 17）<sup>4</sup>。それはこの社会の成員であれば、どのような者であれ、彼のような生を営む可能性があるということを示すことであり、そのために見田はN・Nという匿名的な表記を永山に対して行った<sup>5</sup>。

当時、「家郷をあとにする青少年は、ひとつの解放への希望を抱いて……都会に足をふみ入れ」た。N・Nもまたそのような一人であり、「〈上京〉はN・Nにとって、その存在を賭けた解放の投企であった」（見田 2008: 11）。そして同時にN・Nは「はげしくかつ執拗な家郷嫌悪」（見田 2008: 11）の内にもあった。このような家郷嫌悪は「否応なしに、一つの自己嫌悪として彼の……アイデンティティの中枢に居座ってしまっている」（見田 2008: 12）。N・Nのこのような感覚は、明らかに当時の日本における都市化と地方解体の流れと照応するものである。だが、都市が求めるのは「尽きなく解放された」存在としての金の卵ではなく、一つの労働力として包摂可能なものとしての金の卵である。「彼らの階級的に規定された対自と即自のあいだには、はじめから矛盾が存在している」（見田 2008: 22）。

この構造の中で、N・Nは自らの過去を否定するとともに、外の世界へと憧れていく。彼は「戸籍謄本を必要としない職業に自己を限定しわたり歩」き（見田 2008: 30）、また、外来物を身につけるような「派手好み、イキがり見栄っぱり」といった「自己顕示欲」（見田 2008: 43）を内化することになる。だからこそ、彼は「憑かれたように執拗に〈密航〉による国外脱出を企てて」（見田 2008: 30）もいるのだ。

N・Nは常に他者の視線を意識している。彼は常にそれに晒されているように感じている。見田はN・Nの置かれた状況を指し示すために「まなごしの地獄」という言葉を用いた。他者はN・Nの存在をまなごしによって固着させる。N・Nはそのまなごしから免れようとし、過剰防衛の結果、不安を増していくことになる。「彼の最初の殺人も、〈密航〉の夢を結果的に遮断するものとして立ち現れた

人間にたいし、ある秘密を擁護するための反射としてなされている」(見田 2008: 30)

見田は、N・Nおよび当時の若者たちの〈孤独への憧憬〉ないしは〈関係からの自由への憧憬〉というものを当時の統計データから読み取っている(見田 2008: 37)。見田は二つの統計データを紹介する。一つ目のデータは、東京都に流入した青少年の不満についての統計データである。それによれば、強く訴えられている不満は「落ちつける室がないこと」、および「自由時間が少ない」ことであり、これらは友人や異性との関係性の希薄さに対する不満より大きな数値を示している(見田 2008: 36)。〈関係への憧憬〉よりも〈孤独への憧憬〉の方が当時の若者たちにとって強く表れていることが確認できる。二つ目のデータは、離職率と休日制度との連関に関するデータだ(見田 2008: 26)。このデータによれば、休日の日数が多くなるほど離職率は減少する。給料などの要素の方が離職率とより大きな相関を示すと考えられるかもしれないが、これについては休日ほどの明確な相関は示されていない。時間面においても、空間面においても、1968年当時の若者たちは関係性に対する希求を抱えるよりも、はるかに、関係性からの自由を希求していたのだ。

見田は当時の若者たちの〈関係からの自由への憧憬〉を描き出しながら、それが極大的な姿として現れた存在として永山則夫の姿を描き出そうとした。見田は、社会構造および社会関係と個人のアイデンティティの間における新たな連関を描き出し、そのことを通じて、ある無差別殺人に関する社会学的な「理解」を示そうとしている。それは非条理な出来事である無差別殺人およびそれを行った殺人者と社会空間の間に新たな回路をつくりだそうとすることでもある。

---

## 2-b. 知的言説への抗い

元々、永山則夫は幼少期から、貧困ゆえに学校にほとんど通っておらず、言語的なレベルにおいても貧困状態(石川 2013: 152)にあった。しかし、拘留下において、彼は猛烈な学習を開始し、知識を急速に獲得しはじめる。1971年に獄中ノートである『無知の涙』を出版した後、彼はさらに数冊の本の出版を開始し、1982年の「木橋」

の執筆開始以降、小説の執筆も開始する。学習過程でマルクスの思想に触発された永山は、「思想」と「文学」という形式で自身の言説を展開していくことになる。一方ではマルクスからヘーゲルへと関心を移したかたちで展開される彼自身の「思想」を、他方では彼自身の少年時代の「来歴」を、ノートと小説の二つの形式を織り交ぜながら、永山は語っていく<sup>6</sup>。

皮肉な言い方をすれば、永山は拘置下において、ようやく「自由」を獲得したとも言える。永山は『無知の涙』の中で次のように語っている。

こんな呑気に文章を綴っている状態を幸福というのではないだろうか？ 安ばいかもしれん、でも、今までを振返ってこのような境遇には出会ったことはないし、十分に考える時間はなかったから、私には幸福と言える。今は誰からも意識されていなく、誰へも激情を傾注させていない——それだから、私なりの幸福感を満喫している。ここには、何の葛藤も紛糾もありはしない。……人間という物は、考えられる時間が有るのなら、自由に人生、世界の事、様々な空想を思想のなかで映がける時間が有るのなら、幸福だというべきではないだろうか。そうなんだ！ 私は今仕合わせなんだ！（永山1990: 337）

見田はこの部分を「まなごしの地獄」において引用しており、その分析はこのような永山の主張を追ったかたちで行われているものであるだろう。

永山は自身の犯罪をマルクス主義的な枠組の中で解釈し、ついには、自身の犯罪を、「誤った階級闘争」として理解するようになる<sup>7</sup>。彼は自らの貧困に由来する無知ゆえに、闘争すべき相手を見誤り、「仲間殺し」（永山1977: 39）を行ってしまったと考えるようになる<sup>8</sup>。「社会（資本主義）の仕組みを知ってゆく私は、罪の意識とやらは薄らいで来た」（永山1990: 309）のであり、「若し、私があの罪の少しは有るとしても全く無いと言える人々ではなく、ブルジョアジーを殺っていたのなら、本当に苦しそうであるのなら、私の行為は英雄的だ、と思う気持ちを堅信する。……この事件が無い場合、私は一生涯（何度もいうが）、ただの牛馬に終わったであろう」（永山1990:

347) という認識に至る。彼は社会科学的言説を吸収し、自身を極端なまでのマルクス主義者としてつくりあげる。彼は“来るべき”「思想」を語り、また、彼を“つくり上げてきた”「過去」を語る。

先ほど確認した見田の社会学的分析もまた、社会関係が個人のアイデンティティに作用する様を分析するという意味で、独自のかたちでマルクス主義的なものである。しかし、永山の見田の分析に対する態度はアンビバレントなものである。永山が自らの来歴を描いた小説において主人公の名前をNとしていることの中に、細見和之も推測するように（細見 2010: 205）、見田の影響を見て取ることは可能であるだろう。だが、一方で、永山は『反-寺山修司論』の中で、「寺山修司よ、サルトルよ、見田宗介よ、その他の『犯罪学者』諸氏よ」（永山 1977: 38）と彼らの自らに対する“「理解」の間違い”を論じている<sup>9</sup>。永山にとって、「見田宗介という『有名な社会学者』」もまた、『「まなざしの地獄」』という原因無視論を書いた存在とされる（永山 1977: 283）。

永山によれば、彼らは「原因（客体）-動機（主体）-結果（客体）」という事物を考えるにあたり、『「原因（動機）-結果」』という従来の〈原因〉も〈動機〉も一緒くたにする論理に切り縮め」るような「ブルジョワ的犯罪観以外の何物でもない」分析を行っていると言われる（永山 1977: 23）。例えば、見田も寺山も、永山の「カタカナ文字」に溢れた「ケバケバした〈モダンさ〉」（永山 1977: 227）を志向する「自己顕示欲」を強調するが、永山からすれば、それらは都市生活を送る中で「名は知るはずもな」（永山 1977: 229）いままに手に入れた物に過ぎない。彼らは、永山の置かれた「状況」を、永山の「人間性」に還元するかたちで理解すると、永山は論じている。“極端なまでのマルクス主義者”永山から見れば、見田らの主張は“半端なマルクス主義”として定位されることになる。より強固な「客観体」としての「社会」的要素を永山の言説は語ることとなる。

そもそも、永山は、自らに「同一化」を行おうとする様々な論者に対する強い批判を著作の中で幾度も行っている<sup>10</sup>。ノートの中で、永山は以下のように語っている。

私に接近して来た今までの人々……が、一等最初に切り出す言葉は「私も〇〇で君と同じだ」という類似の言語が<sup>(ママ)</sup>大既聞か

れるのである……。この同情者の人物たちに同調されると悪い気はしないのであるが、何度も聞かされると馬鹿にされていると確実に意識するのであった。(永山1990: 368)

さらに数ヶ月後のノートでは「プロレタリアの皮を覆ったブルジョワ的ハイエナ」への「苛立ち」(「本当に[!], 苛立つのだ)や「軽蔑」を語るようになる(永山1998: 219)。見田や寺山の彼らに対する「同調」は、「永山の感情を……抹殺して、自分自身との『同一化』の作業を行い」、自身とは「全く逆境で質が違うのに、偶然をさも『自由選択』したかの如きように描くものである(永山1977: 229)<sup>11</sup>。そのように主張する永山は、最終的な局面で、彼に「同一化」しようとする「知識人」たちを拒絶する。

見田は「まなざしの地獄」の中で、永山則夫にN・Nという匿名的呼び名を与え、彼の「過去」を分析した。それによって、永山という「特異者」と「社会」との間をつなぐ橋を生み出そうとした。永山は、一方でその匿名を用い自分の過去の姿を「小説」というかたちで再構成しながらも、他方では、その「理解」を拒絶しようとした。おそらく、永山にとって、見田の分析は、彼の自我の「固有性」を「匿名化」することで奪うものであり、また、彼の「過去」を強く分析することで彼の「可能性」を奪うものとしてあったのだろう。見田の分析や知識人による「理解」自体が、永山にとって、“新たな”「まなざし」となってしまうものであった。それを永山はふるい落とそうとした。

しかし、皮肉にも、この永山のふるまい自体が、「過去」の自己を嫌悪し、それとは違った自己の可能性を模索しようとするという見田の分析を裏書きするものにもなっている。ここには、学問的分析と当事者との葛藤を含んだ奇妙な関係性が存在している。

社会学が生み出した言説と永山が語る自身に関する言説は、「異端者」化する社会的言説を避けながら、強く重なり合う部分が存在しつつも、最終的な局面で、強く反発し合うものとしてあった。

---

### 3. 秋葉原事件を語る言葉たち

21世紀に入った日本では経済成長の停滞とともに若者の雇用の不安定化が問題視され、「新たな貧困」の問題が話題にされはじめた。ロストジェネレーションとも称される若者の世代の一人、加藤智大が2008年に秋葉原で起こした無差別殺人事件は、まさにこの「新たな貧困」問題の象徴として語られるようになる。元々、中流家庭出身で進学校にも通っていた加藤が派遣労働者の立場になり、凶行におよぶ様は、日本社会全体の変化と対応させて考えてみることも可能であるだろう。加藤智大は2011年に死刑判決が下されているが、現在は上告中である。

本章では、この秋葉原事件に関する二つの言説を確認していく。

---

#### 3-a. 「まなざしの地獄」再び

2000年代の労働問題については、若者論の文脈を主として、社会的言説も数多く展開されていた。その矢先に起きた秋葉原事件についても、その延長線上で数多くの言説が用意されることになる。その中では、不安定雇用の若者が起こした無差別事件という共通点から永山則夫事件が想起され、見田宗介による「まなざしの地獄」を秋葉原事件を考察するための補助線として利用する論者たちもあらわれることになる。彼らの中には、「まなざしの地獄」との重ね合わせを意識して、加藤智大をKというイニシャルで表記する者たちも多くいた。四十年前に起きた事件の分析との重ね合わせの中で、秋葉原事件は考察されていくことになる。

当初は“新しい貧困”という軸を中心にして考察されていた秋葉原事件であったが、徐々にその焦点は「コミュニケーション」という問題の方へと推移していくことになる。加藤は自らの労働環境には満足していたという発言を行っており、彼の犯罪動機は、彼が使用していたインターネット掲示板を“荒らして”いた匿名参加者たちへの警告にあると供述するようになっていた。加藤はしばしばインターネット空間に数々の自らの容姿や人間関係に関する自虐的な発言を投稿していた。そしてその果てに、犯罪予告をインターネット上

に投稿し、犯行におよぶというところまで行き着いてしまった。人々は、加藤のコミュニケーション・スタイルや劣等感の方に関心を向けはじめた。

加藤のインターネットへの耽溺はしばしば彼の劣等感と結びつけられて考察された。彼は「現実のコミュニケーション」への不得手さの自覚から、インターネットのコミュニケーションへと強迫的にのめりこんでいったという分析は多く存在している。精神分析を主な研究領域とする斎藤環は以下のように述べている。

通り魔事件の容疑者達に共通するのは、彼らが学校や社会のコミュニケーション・サークルから疎外された経験を持つ、コミュニケーション弱者であったという履歴だ。現代においては、多様なマイナス要因が、最終的にコミュニケーションの問題へと輻輳しやすい構造があり、それは加藤容疑者の「不細工には恋愛する権利がない」といった言葉に象徴的に現れている。そう、若者の不幸は、貧困より障害よりも、たとえば「非モテ」などの言葉に象徴されるような、コミュニケーション弱者の形式に集約されやすいのである。(斎藤 2008: 37)

現在の社会は以前の社会よりも人間関係の形態はより複雑なものになり、コミュニケーションの重要性も増大している。それ故にある種の人々にとって、人間関係を形成することや維持することの困難さも大きなものになってしまう。

中島岳志は『秋葉原事件』の中で加藤の行動原理として、「アピールしてわからせる」(中島 2011: 30)という傾向があることを指摘している。加藤は母親のしつけの影響などから、「思っていることを口に出さず、行動でアピールして相手に理解させる性質が身についた」(中島 2011: 30)と語っているという。中島は、社会的に孤立状態にあった加藤が、インターネット上で他者の気を惹き、人間関係を維持するための「アピール」を行っていたと考えている。自虐的な書き込みでさえも、他者に「アピール」するための「ネタ」であると中島は考察する。そして、その「ネタ」で「アピール」という加藤の行動原理は、インターネット上での犯行予告、そして、「現実」的な犯行というかたちにまで追い立てられてしまったと彼は分

析する<sup>12</sup>。

大澤真幸は上記の分析的言説をふまえながら、2008年に出版された『まなごしの地獄』の新版単行本の解説で永山と加藤の違いを強調して語っている。永山が「まなごしから逃れるために個室を求めた」のと対照的に、加藤は「まなごしの及ばない場所」、「誰の視線も届かない個室のような場所にいる」（大澤 2008: 109）。それは「まなごしの不在の地獄」という場所であり、「関係からの自由への憧憬」を抱えていた永山に対して、加藤は「関係への憧憬」を抱えている。この違いは単に彼らのパーソナリティの違いを表しているのではなく、彼らが属していた社会の性質の違いを表している。永山も加藤も、ある部分においては、共通の社会的苦悩を経験していた。だが、両者間のその苦悩の表出の形態はちょうど対照的なものとしてある。社会的な非条理とは、社会学的文脈を反映する。

秋葉原事件に対する社会学的な分析は、永山事件に対する分析を重要な参照項としつつも、むしろ、二つの事件の間の違いを強調して語るかたちで、その言説を展開していった。事件直後、このような秋葉原事件に対する分析は社会の中できわめてメジャーなものとしてあったが（それは『まなごしの地獄』の新版単行本発売というリアクションのはやさからも見て取れるだろう）、現在ではあまり言及されることがない。秋葉原事件と同様に「ロストジェネレーション」や「フリーター」というものに対する社会学的分析が一時的にもはやされながらも現在ではあまり参照されないことにも見られるように、不安定雇用のさらなる「一般化」とともに、秋葉原事件は単なる一つの“過去の出来事”として消費されてしまったかのように感じられる。このような事件およびそれについての言説の需要状況それ自体も、両事件が置かれた時代的文脈の違いを表現していることだろう。

---

### 3-b. 「社会との接点」への切迫

彼に関する言説消費の一時的な“ブーム”が去った2012年、加藤智大は『解』と題された本を出版する。現在までに合計四冊の本を加藤は出版しているが世間ではあまり大きな話題とはされていない。

これらの本の中で一貫して、加藤は自分自身が起こした凶行の動機を自分で「理解」し、そこからこれ以降の殺人事件を未然に防止

する手がかりを見出そうとしている。まさにそのまま、『殺人予防』と題された本の中で彼は「私は事件を、起こしました。体験したからこそわかる真実があるのです。『有識者』らに騙されないで下さい。私は、真剣に事件を予防したいと考えています」(加藤 2014b: 7)と述べている<sup>13</sup>。彼は自らの犯罪に対する解釈の“間違い”によって「私の存在が殺されている」と感じるのと同時に、「ご遺族や被害者の方が私ではないものに怒りを向けているその救いのなさが、とてつもなく悲しい」(加藤 2014a: 172)とも述べている。彼は自らの行為の「意味」を「理解」し、それを社会に向けて語るために、彼の言説をつくりだそうとしていく。

そのため、彼はこれらの本の中で、他者による自らに対する解釈のほとんどを否認していく。

専門家といえども、事件を起こしたことはないでしょう。確かに、「百聞」はしているのだと思います。しかし、私は「一見」しました。だから、私が起こした事件に限らず、どんな事件に対しての専門家の話も、おかしいことがわかります。素人は騙せても経験者にはウソがすぐバレるのは、何でも一緒です。(加藤 2013: 28)

『殺人予防』の第一部は「間違いだらけの『有識者たち』」と題され、徹底して、彼に対する分析が事実判断のレベルで否定されていく<sup>14</sup>。前節で見た中島岳志による分析も、彼が分析の素材としているインターネット上の発言が、他者による「なりすまし」の発言に大きく依拠したものであることを理由に否定されている。永山が自らに対する解釈を否定する場合と異なり、加藤は解釈者の「思想」に迫ることなく、「事実」を論拠に「間違い」を黙々と指摘していくことになる。

当初なされた社会への不満という分析に対しては、加藤は以下のように反論している<sup>15</sup>。

こういう人間と私が同類だと思われたのは、非常に腹立たしいものがあります。どうして社会のせいにするのでしょうか。…自らの能力不足・努力不足を顧みることなく何を甘えている

のかと不愉快な気分になります。……文句があるなら、起業して下さい。それが無理なら、黙って働いて下さい。私はそうしました。私には社会の不満などありません。(加藤 2014b: 130)

加藤はまず社会・経済的構造の問題と彼の犯罪とを結びつける言説を否定する。続いて、劣等感という彼の心理構造に関する分析も批判する。加藤に対する分析はその多くが彼の「アピール」という行動原理について、「劣等感」に結びつけて分析していた。そこでは加藤は「孤立」ゆえに「関係性に対する憧憬」を持っていたと語られている。だが、加藤はその分析も否定する。

掲示板での私は「不細工キャラ」です。他の掲示板利用者たちがそれを望んでいたからです。……私としても皮肉や嫌味を込めたブラックジョークは好きですからむしろ楽しんでやっており、何の問題もありませんでした。本心には程遠い「作り」最大のキャラでしたが、嫌な度合はゼロです。……私は、掲示板では、立場や世間体を気にせず、難しいことを考えず、ただ楽しく雑談してただけです。(加藤 2014b: 42)

ここで劣等感や孤立に関する発言もまたコミュニケーションに関する「ネタ」であったと加藤は語っている。

彼の著作を読んでいると、しばしば「社会との接点」という言葉が登場することに気づかされる。「孤立」とは「社会との接点」が失われた状況を指すが、彼はむしろ「社会との接点」を失うことを恐れている。加藤は「私は、社会との接点がなくは生きていられません」と述べ(加藤 2014a: 36)、「社会との接点が失われるのは、それこそ自殺してでも逃れたいと思うほどの苦痛」であるとも語る(加藤 2014a: 70)。「物語」形式(加藤 2014a: 3)で彼の「来歴」を述べた『東拘永夜抄』<sup>16</sup>では、おそらく意図しないかたちも含め、この「社会との接点」を失うことへの不安という彼の行動原理について多く書き記されている。タクシーの運転手との雑談(加藤 2014a: 94)や電車での老人との会話(加藤 2014a: 99)も彼にとっては「社会との接点」を確認させてくれるものとして語られ、「電車に乗ってひとりしていると、何だか不安になってき」て、「社会との接点を求め、掲示板

にアクセス」(加藤 2014a: 97) するような彼の不安が強く描き出されている。

そして、加藤は他者に喜ばれることやお礼を言われることによって、この「社会との接点」の存在を確信している。そのため、彼は友人に物を与え、キャラを作り笑いを取り、他人に親切をする。彼の趣味だと解釈されていた秋葉原通いも友人を喜ばせるための「ネタ探し」(加藤 2014a: 57) であり、警察での取り調べの過程でも刑事相手にウケがとれたと喜びながら語っている。「人間関係を円滑にすることは、良いことなのです」(加藤 2014a: 143) と彼は語る<sup>17</sup>。

つまり、彼は「まなざしの不在」の中にあるのではなく、「まなざしを失うことの不安」の中にある。ここには微妙ながらも大きな違いがある。彼は「孤立」しているのではなく、「孤立」をひどく恐れている。特に、携帯電話を通じたインターネットへのアクセスという「関係性」への常時接続が可能になった状況下では、「孤立」は“状態としては”回避可能なものとしてある。このような「孤立」からの逃避可能性の増大は、むしろ、関係性維持に関する強い不安を生み出すものとしてある。

そして、その強迫的にも感じられる関係性維持という行動原理は、関係性を掻き乱す他者に対する苛立ちというかたちでもあらわれている。先の「社会への不満」という彼の解釈に対する彼の反論を見てもわかるように、彼の秩序維持に対する規範意識はきわめて高いものとしてある。彼は幼少期より、他者が関係性を攪乱する行為を行った際、言葉でそれを咎めるのではなく、行動によってそれを知らせようとする「しつけ」(加藤 2014a: 15) を行っていたと語っている。「自分が正しいと思っている者が相手に痛みを与えて改心させようとするのは正しい」(加藤 2012: 72) と彼は述べる<sup>18</sup>。

このような自らの行動原理の延長に加藤は自身の犯罪を位置付けようとする。自身が使用しているインターネット掲示板において、彼のふりをして発言を繰り返す「成りすまし」や場の空気を掻き乱す「荒らし」たちに、その「間違った考え方を改め」てもらおう(加藤 2012: 72) ために、彼らが「痛みを与えて改心させ」ようとした(加藤 2012: 68) という動機を彼はまず説明している。犯行はそれ自体は上述の「しつけ」の論理の一環としてある。そして、その時点において「他人のことはどうでもよくなっ」てしまっていたと述べ

る（加藤 2012: 112）。その際に加藤は想定できる「関係性の範囲が普通の人よりかなり狭い」という自身の傾向性について語っている。彼は直前に、一度犯罪を思いとどまったとも語るが、すでに犯罪予告をしてしまっているために、逮捕され「刑務所」という「孤立している世の中に放り出されるくらいなら」、そこで終わりがやってくる「死刑の方がマシ」と考え（加藤 2012: 110）、結局、犯行の実行に向かうことになってしまう。これらはすべて彼の「関係性維持への不安」に対する語りとの関係の中で捉えることが可能な事柄であるだろう。加藤は最初の著作の終わりに次のように語っている。

私は社会への不満など持っておらず、秋葉原の通行人に対しては何の思いもありませんでした。むしろしゃして誰でも殺したいとやつ当たりで殺傷したのでもありません。自分の目的のために、まるで道具のように、というより、まさに道具として人命を利用した、最悪の動機でした。（加藤 2012: 169-70）

「しつけ」という「目的」の「正しさ」はまだ保持しながら、加藤は自らの「手段」選択の「失敗」として、自己の犯罪を語ろうとしている。

加藤は、彼の語りの中で「社会への不満」を否定し、「関係性維持」という彼の中心的な価値態度を表現する。そして、「不満」や「孤立」といった否定的要素を彼の内に見出そうとする社会的言説群に対して、その“誤り”を単に指摘している。だが、その彼の語りは、“新しい貧困”という社会的言説の“ブーム”の終焉の後に行われたものであり、あまり顧みられることはない。

だがその中で加藤自身は自らの言説構築を新たな「社会との接点」と認識し、それを継続している。

今の私は、事件について説明するという、社会の中で存在する理由があります。全てが前向きに回りはじめました。私には「やること」があります。「やるべきこと」と言うべきですが、それは生きる動機になるものです。（加藤 2014a: 136）

「それすなわち、社会との接点を得たということ」である（加藤

#### 4. 言説の連関と非条理の空間としての社会

以上のようなかたちで社会的非条理としての無差別殺人に関する四つの言説は存在している。最後にこれらの言説の連関について考察していきたい。まずは簡単にこれらの言説がどのようなものであったか、確認していこう。

1968年の永山事件に関する社会学的言説は、当時の出稼ぎ若者の「孤独」への欲望と永山の事件前の行動を対応させるものとしてあった。「異端者」として語られる永山則夫という存在は、むしろ、同時に社会的欲望を鋭敏なかたちで反映した存在として語られる。「尽きなく生きる」ことをしようとした社会的存在は、それ故に、「孤立者」として逆立して現れ、「社会的非条理」の当事者となる。彼は誰よりも社会から寄せられる「まなざし」を意識せざるを得ず、それ故に「社会的関係からの離脱への憧憬」を膨らませていった。そのようにこの言説において、永山の姿は描き出される。彼は当の社会の欲望の最も忠実な受容者であるとも言える。それ故に、彼は匿名的なN・Nという表記をされることになった。

だが、当事者たる永山はこのような言説に対して反抗しながら、彼自身の言説を組み上げていく。彼自身は確かに「社会」の影響の下に自身の犯罪を行った。だが、それは彼が社会の忠実な模倣者であったからではない。彼の犯罪は当の社会に対する「闘争」の一形態として（ただし、彼の「無知」ゆえに対象選択を誤った「闘争」として）語られることになる。それは、著作の中で当のマルクスへの批判すらたびたび行われるような、苛烈なかたちでの「マルクス主義」を背景としたかたちで展開されるものであった。

2008年の加藤智大の犯罪に関する社会学的言説は、永山事件に関する社会学的言説を大きな参照項としながら、徐々にその違いを語るものとして展開されることになる。「まなざし」を絶えず意識せざるを得なかった永山に対して、加藤は「まなざしの不在」という「孤立情況」の中に置かれている。彼は「関係性への憧憬」の下に、他者への「アピール」を繰り返していくことになる。秋葉原事

件の社会学的言説は、二つの事件の間の差違を、社会的背景の差の下に抉出しようとする。

このような言説群を、当事者である加藤は一括して“間違い”として棄却し、自身の言説を展開していく。そして、自らの動機を「不満」や「孤立」といった解釈から解放し、むしろ、「社会との接点」や「関係性」を「維持」することに向けた切迫の中に位置付けようとする。彼はむしろ「秩序維持」の意思を表明し、その手段選択の誤りとして、自身の犯行を説明する言説を構築している。

これらの言説の連関の中でまず着目してみたいのは、二つの事件の間の社会学的言説と当事者の言説との間の関係の違いについてだ。永山の言説においては、彼に関する社会学的解釈との関係は非常にアンビバレンツなものとして存在していた。彼にとって社会学的言説は自らに「同一化」を強いてくるようなものとして感じられ、罵倒に近いかたちで対応しながらそれに対する彼独自の語りを生み出していった。このような永山の反応は、彼が「思想」と「文学」というかたちで自身の言説を構築しようとしていたこととも関係するだろう。彼は自らをその一部として組み込もうとする「学問」の言説に対して、むしろ、自分自身がそれを組み込んだかたちでより強固な言説をつくりだし、それを「社会」に対する「批判」的なかたちで研ぎ澄ましていった。ここには強い言説の間の拮抗が存在しており、また、それ故に両者ともに「社会批判」の言説としての強度が存在している。

だが、秋葉原事件の場合はこのような拮抗は存在していない。加藤は黙々と「有識者たち」の“間違い”を指摘しながら、同時に「事実」としての自己の行為の「意味理解」を志向している。そして、そのような「理解」の探索を遂行することで「社会との接点」を生み出そうとしている。彼は、学的言説がつくりだそうとする「不満」や「孤立」といった「社会」に対する異和の感覚を積極的に消去するかたちで自己の言説を構築していく。加藤の言説の中には学的言説の無効化に対する志向性が存在していたとしても、それに対する拮抗は存在していない。

このようにこの二つの事件当事者の言説における学的言説との関係の間には、「拮抗」と「無効化」という大きな違いが存在している。逆に言えば、社会学的言説は、永山との間に葛藤の情況をつくりだ

すことに成功したが、加藤との間にはそのような強い関係性をつくりだすことはできていない。このことはこれらの言説が「社会」との関係に生み出し得た関係性とも対応するものであるだろう。永山が書いた書籍にしろ、見田が行った社会学分析にしろ、それらはそれぞれのジャンルにおけるある参照項として、半世紀近く経った現在ですらいまだに機能しうるものとしてある。だが他方の加藤の事件に関する言説は一時的に話題になったとはいえ、急速に社会空間の内で消費され、無化されてしまう。「貧困」という問題関心もまた、現在の社会の枠内では、一つのトピックとして語られながらも、「自明な問題」として処理され、忘れられていってしまう。

当事者の言説の内で永山は「社会」を「批判」というかたちで、自身と「社会」との関係性を生み出そうとした。それは自身が引き起こした社会的非条理を「社会」それ自体の「矛盾」として指し返す行為としてある。彼の言説の内で、彼という存在は「社会」の「矛盾」の「媒介者」としてある。そして、拘置下の「反省」の空間の内で、彼はその「媒介者」としての位置を把握し、自身をその「批判者」という形態へと編成し直す。それが彼自身の「社会的非条理」に対する対応の仕方として存在している。

他方で、加藤の言説は、自身の志向性を「社会秩序」の維持という形態で捉え直し、自身のパーソナリティの特異性という形態で自らの行いを捉え直すものである。つまり、社会的非条理を引き起こした「矛盾」という要素を彼個人に帰責させている。ただ、彼は自身を“唯一の”「逸脱者」と設定することはしない。それは彼が自身の行為の「意味理解」を通じて、「殺人予防」を行おうとしていることからわかることだろう。この「社会」の中には一定数、彼のような「逸脱者」が存在する。その意味で「社会」は、彼が存在しなかったとしても「矛盾」が存在する世界としてある。だからこそ、彼は自らを「反省」することを通じて、「矛盾」の噴出を「予防」することをしようとする。このような言説を構築するということは、「社会」への「順応」という在り方で、「社会」との関係構築しようとするところでもあるだろう。それは結局のところ、彼の言説の「特異性」を失わせてしまうことになる。

彼らは、自身を社会からの“特異なる”「逸脱者」として排斥しようとする社会的言説に対して、自身と「社会」との関係を再構築す

るために、自分自身の言説を構築していこうとする。だが、その言説の志向する方向性はむしろ正反対のものとして現れてくる。

井口時男は少年殺人者に関する論考の中で、1980年代後半を境とした「モダン」の犯罪と「ポストモダン」の犯罪の違いについて論じている(井口2011:10)。「『小説』を読み書く」犯罪者と「サブカルチャーの引用によって『表現』する」犯罪者という二つの区分をそこに描いている。これは単に「言説」の在様の違いを意味するだけでなく、もっと広く「言説」がいかに自身と「社会」との関係性を捉えているのか、ということと関連したものであるだろう。それは単に彼ら個人がそのような視座を備えていたというよりも、社会に共有されたある感覚を反映するものとしてある。

本論文で見た四種類の言説はすべて「孤独」という心的状態に関する問題の周回をめぐるものとしてあった。永山は「孤独」を目指し失敗し、加藤は「孤独」を避けようとして失敗した。これらの言説は端的に言えば、そのような出来事理解を行っている。ここには違ったかたちでの「孤独の不可能性」という問題が存在している。永山において「孤独」は「情況」として不可能なものとしてあり、加藤において「孤独」は「実存」として不可能なものとしてあった。両者に関する言説は異なったかたちで「孤独」が存在し得ない世界を描き出している。たとえ客観的な情況としての「孤立」はあり得たとしても、

「孤独」とは「社会」との距離が一定程度、離れた状態を指す言葉でもある。彼らに関する言説において「孤独」が不可能なものとしてあるということは、彼らに関する言説が「社会」からの「自由」を確保することが困難なものになってしまっているということも意味している。非条理に関する言説と「社会」の関係性を新たな方向に向けて再構成することは、この「孤独」なるものの意味を考え直してみることの中にあることだろう。彼らにおいて「不可能」であった「孤独」の意味付けは再考されるべきものとしてある。

華やかな都市の光に憧れ上京したにもかかわらず、日本各地の夜の闇の中を彷徨いながら匿名的な犯罪を繰り返していった永山則夫と、派遣労働者として郊外をめぐり、またネット空間の中で匿名的存在として存在しながらも、最終的には白昼の繁華街で凶行におよんだ加藤智大。両者の人生は真逆の皮肉な逆接によって構成されて

いる。社会的非条理はそれが存在する社会を反映したものとしてある。そして、その「理解」を行おうとする言説もまた社会を反映したものとしてある。様々な「理解」の力線を丹念に追尾すること、それによって辛うじて、非条理の空間としての社会の姿を描出できるのではないだろうか。

〔注〕

- 1 本論文は、2014年8月に開かれた韓国社会学理論学会での招聘研究者として行った講演を基にしたものである。ただし、時間の問題や背景となる社会的文脈の関係上、あまり展開できなかった論点を掘り下げるかたちで執筆を行った。英文原稿は「한국이론사회학회2014」の39～47頁に掲載されている。
- 2 例えば、ジョック・ヤングは『排除型社会』の中で、社会が犯罪者を教育などを通じて再統合していく「包摂」社会から「異質者」として「吐き出す」社会への変化を論じているが、「心の闇」言説の増加をこれと重ね合わせ理解することなども可能だろう。
- 3 ここでいう「メディア的言説」とは「社会のマジョリティー」の言説という意味合いを含めてもいるが、本稿では、「社会」なるものを可能な限り、実体化することを避けるかたちで議論を進めることを考えたために、「観察可能」な対象として「メディア」という言葉を使用している。だが、「言説」の「社会性」に関する問いは実際のところ、かなり難しいものとしてあり、本論でも議論における「社会性」の「密輸」は避けがたいものとして存在してしまっているはずだ。
- 4 見田は「社会意識分析の方法」を語る中で、「極端」だったり「例外的」であったりする事例がむしろ「平常的な事例を理解するための いっそう有効な戦略データ」となりうることを語っている（見田 1979: 161）。活火山は地表の平均的なサンプルとはならないが、地殻の内部構造を知るためのデータとなるという比喻を見田は用いている。
- 5 ただし、もっと単純に犯行時は「少年」であったため、通例に従い匿名化すべきという倫理的要請もこの命名には働いているとも考えられる。
- 6 永山は後に「小説」の形式の中にも自らの「思想」を織り込んでいくが、細見和之は永山の文学性を高く評価しつつも、その「思想」については「たんに一般論の領域を超えていないか、あまりに一面的であるかであって、およそ説得力を欠いているとしか言いようがない」ものであり、「情念の所在を示す『記号』以上のものではない」という評価を下している（細見 2010: 51）。概ね、その意見に賛同したい。
- 7 永山は『罪と罰』を犯行前に読んでいたという「事実」を「告白」したことを、「とうとう言ってしまった……」という言葉とともにノートに書き記している（永山 1990: 476）。これは永山にとって、事件の「計画性」を主張することでもあり、彼の犯罪の「思想性」を知らせることでもある。実際のところ、この「事実」が真実この通りであったのか、もしくはマルクス主義学習の過程で構成された記憶であるのかは、その前後の記述との整合性から判断が難しいと現段階では考えている。
- 8 彼が自らの犯行に対する罪悪感の自覚を強く持つのは、被害者に生まれたばかりの子どもがいたことを知らされたことがきっかけであり、それは幼少期の自身のような存在を自分が生み出してしまったことへの後悔によるものであるとも語ら

れている。

- 9 ここで寺山と見田が並べて批判されているが、そもそも、見田の論には強く寺山の永山論の影響があることを推測することができる。寺山の初期の永山論「歴史」は、見田も大きく関わっている雑誌『思想の科学』に事件直後に掲載されたものであり、また、見田の寺山論は「まなざしの地獄」と一部内容が重なっているものでもある。ここで永山が、見田と寺山の分析を並べて批判することは適切なものであると考える。
- 10 永山が他に批判の対象として語るのは高野雅夫や井上光晴、松田政男といった彼との「共闘」を行おうとした人々である。ここに永山の「批判」の傾向を見て取ることはできるだろう。
- 11 寺山は「津軽」という土地を語る中で永山について語るが、土地の南北の違いを抽象化しながら、「津軽」というカテゴリーで自分と永山を「同一化」する寺山の語り口を、「風土」の物神崇拜という軸で永山は批判している（永山1977:43）。この寺山に関する「自然」批判は、北海道という土地で育ったため、「方言」を持たず、「東北出身者」の中で浮いた存在となっていたとも語られる永山の立場性が強く出たものであると考えることもできるかもしれない。
- 12 近年の永山則夫に対する「動機理解」の中では、彼を温かく扱ってくれなかった家族に対する「当てつけ」とするものも出はじめている（例えば『永山則夫——封印された鑑定記録』。「動機理解」の時代的文脈の影響をここに見ることもできるだろう。
- 13 2012年にマンガ「黒子のバスケ」の作者や関係各所に脅迫状を送る事件が起きたが、この事件の犯人は加藤の書物を自身の事件を考える辺り参考にしたと語っており、それに関して加藤がコメントを返してもいる（月刊『創』2014年11月号）。
- 14 ただし加藤は唯一、小野浩一『行動の基礎——豊かな人間理解のために』という書物に対してのみは高い評価を与えている（加藤2014:236）。「行動分析」的な心理学が評価の対象としてあげられていることは時代状況と合わせて考えてみるとおもしろい。
- 15 『解+』第8章においては、彼は自分に対して行われた「不満」や「悩み」に基づいた動機解釈に対して、逐一、冒頭で「自分がこのような不満があるからこのような発想が出てくるのでしょうか」と書くかたちではじめ、その後それに對する反論を記している（加藤2013）。
- 16 なお、このタイトルはテレビゲームのパロディであるとも語られている。実際、各章はStage1や2と記され、逮捕後での警察でのやりとりはExtra Stageと題されてもいる。
- 17 加藤は性風俗経験について語る際にも「性的興奮もなく」、お金を払った際の「ありがとう」という「一言が聞きたくて」そこに行くこと記している（加藤2014a:98）。それを一つの「社会参加」として彼は語っている。この言表がどの程度「事実」としてあるのかの判断は難しいが、彼自身がこう書き記すにあたり、自らにおける「事実」であると考えているであろうと推測することはできる。
- 18 加藤はこの考えが本当に正しいのかということに対する迷いを述べつつも、これが「世の中のどこにでもよくあること」であり、「多数派」の考えであるから、善悪の判定を「考えても仕方ありません」と述べる（加藤2012:72）。
- 19 ただし、死刑確定後は外部との交流は強く制限されるため、その場合「外部に発信できないのであれば考えるだけ無駄です。仕方ありませんので、確定後は執行日まで無駄に生きるだけです」（加藤2014b:231）とも加藤は書いている。

## 〔文献〕

- 井口時男, 2011, 『少年殺人者考』 講談社.
- 石川忠司, 2013, 『『無知』と『涙』』『増補新版永山則夫』河出書房新社
- 大澤真幸, 2008, 『『まなごしの地獄』解説』見田宗介『『まなごしの地獄』』河出書房新社.
- 加藤智大, 2012, 『解』批評社.
- , 2013, 『解+』批評社.
- , 2014a, 『東拘永夜抄』批評社.
- , 2014b, 『殺人予防』批評社.
- 斎藤環, 2008, 「若者を匿名化する再帰的コミュニケーション」大澤真幸編『アキハバラ発』岩波書店.
- 鈴木智之, 2013, 『「心の闇」と動機の語彙』青弓社.
- 寺山修司, 1972, 『寺山修司詩集』思潮社.
- 永山則夫, 1973a, 『愛か—無か』合同出版社.
- , 1973b, 『動揺記 I』辺境社.
- , 1977, 『反—寺山修司論』JCA.
- , 1984, 『木橋』立風社.
- , 1987, 『捨てごっこ』河出書房新社.
- , 1988, 『なぜか, 海』河出書房新社.
- , 1990, 『無知の涙——増補新版』河出書房新社.
- , 1990b, 『異水』河出書房新社.
- , 1997a, 『華』(全4巻)河出書房新社.
- , 1998, 『人民を忘れたカナリア』河出書房新社.
- , 1998b, 『ソオ連の旅芸人』冒險社.
- 中島岳志, 2011, 『秋葉原事件』朝日新聞出版.
- 細見和之, 2010, 『永山則夫』河出書房新社.
- 堀川恵子, 2013, 『永山則夫——封印された鑑定記録』岩波書店.
- 見田宗介, 1979, 『現代社会の社会意識』弘文堂.
- , 2008, 『まなごしの地獄』河出書房新社.
- Durkheim, Emile, 1956, *Les regles de la methode sociologique*, Paris: Presses Universitaires de France. (=1978, 宮島喬訳, 『社会学的方法の基準』岩波書店.)
- Young, Jock, 1999, *The exclusive society*, SAGE Publications. (=2007, 青木秀男, 伊藤泰郎, 岸政彦, 村澤真保呂訳 『排除型社会』洛北出版.)